

出雲方言のつどい : 出雲ことば再発見

雑誌名	出雲方言調査報告書 : 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究
ページ	203-220
発行年	2016-03-20
URL	http://doi.org/10.15084/00002423

出雲方言公開講座 / 国立国語研究所セミナー

出雲方言のつどいー出雲ことば再発見ー

(司会) 本日は多数の皆様にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。これより出雲方言公開講座、国立国語研究所セミナー「出雲方言のつどい」を開催いたします。開会に当たり、国立国語研究所、危機方言プロジェクトのリーダーとして今回の方言調査を進めております、木部暢子副所長がごあいさつを申し上げます。

1 あいさつ

(木部) 皆さん、こんばんは。本日はお忙しいところ、こんなにたくさんの方がお集まりくださいまして、ありがとうございます。まず、国立国語研究所というのはどういうところだろうとお思いの方もいらっしゃると思います。また、危機方言って何だろうとお思いになる方がいらっしゃると思います。国立国語研究所は、東京にある日本語を研究するところです。そこで私どもは普段いろいろな活動を、方言も含めて日本語のいろいろな研究をやっているんですけども、2010年から研究所の中のプロジェクトの一つとして、「危機方言」というプロジェクトをスタートさせました。

危機というのは消滅の危機です。今、全国で方言が消滅しつつあります。これを何とか今のうちに記録しておいて、録音しておいて、若い人たちに伝えていこうという活動をしているのがこのプロジェクトです。きっかけは2009年にユネスコが世界中の言語のうち、2,500の言語が近いうちに消滅する心配があると発表したことにあります。2009年です。それで、私どものプロジェクトのスタートが2010年です。

ユネスコの発表の中に日本の中の言葉が8つ含まれていました。北から言うとアイヌ語、八丈語、それから奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語。多くは南の方の島の言語です。奄美は琉球の言語の仲間です。それで、私どももこれまで、2010年から4年間は、南の方の島を中心に方言の調査と記録、保存活動をしてきました。

ただ、考えてみたら、消滅が危惧される方言は南の方の言葉だけではありません。本土の方言の中にも近いうちになくなってしまいうんじやないかと思われるような方言がたくさんあります。「出雲方言は危機ですか」とよく聞かれるんですけども、南の方の言葉に比べるとそんなに危機の度合いは高くありません。それは人口が多い、まだたくさんの方がいらっしゃるからです。ただ、なかなか若い人たちに方言が伝わっていかない。若者たちが方言をしゃべれないという現状があります。出雲もそうだと伺いました。そうすると、人口は多いんですけども、知らず知らずのうちに方言を話す人がいなくなってしまうという形で、消滅が心配されます。そのような方言であることは間違いありません。それで本土の方の方言も、やはり何とか記録して、これから継承活動を進めるようなことをしなきゃいけないなと思っておりましてところ、教育委員会の方からご相談がありまして、まいったような次第でございます。

今回、私どもは17日にまいりまして、18日に安来市へ行って方言を伺いました。それから19日は奥出雲町に伺い、今日は雲南市で方言を伺いまして、明日は出雲市へ行って方言を伺って、解散ということになります。たったの4日間で、ほんの少ししか私どもにできることはありませ

んけれども、本日は、少しでも私どもが勉強した出雲方言についてお伝えしたいと思います。それから、出雲弁の価値ですとかをぜひ守っていきましょうよ、という訴えのために、こういう会を開催させていただきました。

皆さん方もこれをきっかけに、お子さん、あるいはお孫さんに方言を伝えようという気持ちを持っていただくとありがたいなと思っています。ちょっと夜遅くまでになりますけれども、どうぞ、よろしく願いいたします。(拍手)

2 出雲方言の特徴—アクセントを中心に—

(司会) それではプログラムに沿って進めさせていただきます。まず調査報告として、日本学術振興会特別研究員の平子達也さんからご報告いただきます。平子さんはここ数年、出雲弁の研究のため、長期の調査を進めていらっしゃいます。本日は「出雲方言の特徴—アクセントを中心に—」と題して、調査成果をご報告いただきます。

それでは平子さん、よろしく願いいたします。

(平子) 皆さん、こんばんは。日本学術振興会というところで研究員をしていて、今は九州大学で研究をしています平子といいます。僕は今ご紹介をいただいた通り、2年前、2012年の3月ごろから出雲の方に方言の調査で来るようになりました。最初は出雲大社のあたりで調査をしたり、また今回の調査に伺いました奥出雲町の方へ調査に行ったりしてきました。

今日のお話は「出雲方言の特徴」と題しましたが、僕自身、調査できているのはごく一部のことで、地域としての出雲、一口に出雲弁、出雲方言と言っても、地区ごとに特徴が違いますので、本当にごく一部のことしかお伝えできることがありませんが、今、僕が出雲方言の特徴として、こんなことがあるんじゃないか、大事なんじゃないかということをお話しできればと思います。「アクセントを中心に」と書きましたけれども、実際アクセントの話をどれぐらいするかは中身を見ていただければ分かるかなと思います。それでは始めます。

まず、木部先生からもお話があったのですが、この調査の概要を少し話しておきたいと思います。調べたことは大きく3つありました。1つは語彙です。基本的な単語のどういう言い方があるとか、標準語と同じ単語でも発音とかが微妙に違うところがありますので、そういうことをお聞きしました。

もう1つは文法というカテゴリーで調査をしました。これは例えば動詞の使い方とか言い回しの仕方が少し違うところが、出雲方言と標準語とは違うところがありますので、そういうことをお聞きしました。もう1つはアクセントの調査をしました。これはアクセント、出雲方言は非常に独特なところがありますので、そういうことを細かくお聞きしました。調査地点は今回4地点です。先ほど木部先生がおっしゃったように、安来市の広瀬町と奥出雲の横田で調査しました。今日は雲南市の木次町でやりました。明日は斐川にまいります。

今日のお話は最初に言いましたけれども、今日までの3日間の調査と私自身がこれまで出雲で調査をしてきたことについて、少しご報告をさせていただきます。調査の項目として挙げた語彙と文法とアクセントの3つに大きく分けてお話をします。こういったお話をしながら出雲方言、出雲弁の興味深いところ、重要などころを一部になりますけれども、ご紹介できればと思います。お話をする中で、いわゆる標準語と呼ばれているものやほかの地域の方言、ちょっと触れられないかもしれないですが、古い日本語ですね、古典日本語と呼ばれるものとの共通点とか、違いなんというのにも触れられればと思います。

最初に申し上げておきたいんですけども、同じ出雲でも皆さん、感じられていると思いますけれども、非常に地域差があるかと思います。僕自身も今までは西寄りの大社とか、そのあたりで調査をしてきて、この調査の最初に安来の方へ、東の方に行きまして、自分が今まで調査してきたこととはだいぶ違うなと感じました。

もう1つ、年代差も多分にあると思います。僕が調査している奥出雲町では、おばあさんとそこへお嫁に来られた方、2人同時に調査をすることがあるんですけども、おばあさんがこういうふうに言うと言っても、そのお嫁に来られた方はそんなのを言わないでしょうというふうになることもあります。ですから、ここに来られている方も、今からいろいろな例を出しますけれども、これは僕が今まで調べたデータに基づくものですけども、ご自分のお話になる出雲弁、出雲方言と違うところがきっとあると思いますので、そういうことも考えながら聞いていただけると面白いかもしれません。

最初に有名なところですけども、出雲方言の音に関することです。いわゆるズーズー弁といわれるような特徴があります。僕らは専門的にナカジタボインとかチュウゼツボイン(中舌母音)という言い方をしますけれども、「寿司」と「獅子」と「煤」ですか、発音が、ぱっと聞いただけでは分からないというような、「スス、スス、スス」と全部言ってしまうというようなこととか。あと、非常に特徴的だなと僕が思ったのは、馬のことを「オマ」と言ったり、鳥賊のことを「エカ」と言ったり、人のことを「フト」と言ったり、「湯を沸かす」を「イオワカス」と言ったり、そんな言い方があって、標準語とはだいぶ違いますし、ほかの方言でもなかなか見られない特徴です。

あとこれですね。「奥さん」のことを、「妻」のことを「ニョバス」とか「ニョバ」というようなことがあります。普通に標準語みたいに、隣の「女房」と言いますが、ここが「ニョバ」となっているのは、古い、ちょっと古い日本語の特徴が残っているところです。また、「棒で殴る」というのを今日お聞きしたんですけど、「バーで殴る」とおっしゃる方がいらっしゃったりしました。こんなことです。

また、単語に関することですけども、日本語で「一人(ヒトリ)」「二人(フタリ)」「三人(サンニン)」「四人(ヨニン)」「五人(ゴニン)」「六人(ロクニン)」と言いますが、最初、今回の調査で、安来にお伺いしたときは「フトー」「フター」「サンヌン」「ヨッター」と言いますよね。「サンヌン」のところに「ミッター」とか言わないですかと聞くんですけど、安来の方は言わない。普通には「フトー」「フター」「サンヌン」「ヨッター」「ゴヌン」「ロクヌン」と言うんだと言われまして、ああ、何で三人は「ミッター」と言わないんだろうなと非常に不思議に思いました。

それを今回調査に来ているメンバーと話していたら、このプロジェクトでも1回、合同調査に行きました八丈島でも同じようなことがあって、「ヒトリ」「フタリ」は言うんだけど、三人は「ミタリ」とか言わない。「ヨッター」は言うということがあって、そんなところでも何か共通点というんですか、同じような面白いところがあるなど。

「ヒトツ」「フタツ」「ミツツ」「ヨッツ」も、これは「ヒトツ」「フターツ」「メツツ」「ヨッツ」「エツツ」「ムツツ」というんですかね。「ツ」という発音も、僕らはなかなか「ツ」に当たる発音が聞き取れなかったり、フタツは「フターツ」と絶対にのばさなきゃいけないんだよと言われてたりとか、そういうちょこちょここと、あっと思わせるような特徴を伺うことができました。

出雲の有名なところと言えば『砂の器』の舞台、奥出雲町の亀嵩というところは、東北方言と似ているところがあって、それがあからあのストーリーが展開されるわけですけども、本当に似ているかという、実際、発音を聞いてみると、今回のメンバーの方々の話ではずいぶん発

音が似ているところがあるんじゃないかと言われました。何で似ているのかということまでは、今すぐにお答えできるわけじゃないんですけども、そういうことも我々の研究の1つの課題になっています。以上が発音です。

次にアクセントの話になります。大まかに、ここら辺の中国、山陰地方のアクセントは東京的とか、そういうふうにいわれることもありますけれども、東京っぽいといわれるアクセントにもいろいろあります。出雲はもちろん、東京方言のアクセントとも違いますけれども、接している広島とか岡山とか鳥取のもう少し東のアクセントとも違うところなんです。

実はちょっと離れた九州の北の方、僕が今住んでいる福岡のあたりですか、福岡、大分のあたりとか、先ほども出ました東北の方のアクセントと共通点が少しあります。例えばこの3つの単語のアクセントはどうでしょう。皆さん、読んでみると分かると思いますけど、「カ[ゼガ（風が）吹く」、僕が標準語で今から言います。「カ[ゼガ（風が）吹く]」「カ[ワ]ガ（川が）流れている」「ヤ[マ]ガ（山が）見える」と言います、僕は。ですから僕の発音では「川」と「山」のアクセントが同じなんです。でもおそらくここにおられる皆さん、出雲弁の方々は「カ[ゼガ 吹く、カ[ワガ 流れる、ヤ[マ]ガ 見える」と言うんじゃないでしょうか。たぶん「風」と「川」のアクセントが一緒になっていて、「山」は違うアクセント。そういうどれとどれが同じアクセントになっていって、どれとどれが違うアクセントになっているかという組み合わせの面で、東京の標準語とは少し違うところがあります。今、言った「風」と「川」が同じアクセントになっているのは、九州の方と同じ特徴です。

もう1つアクセントで非常に面白いのは、ここはアクセントと「あいうえお」の母音ですね、その関係が非常に密接にあります。例えば「トラ」と「トリ」というのは同じアクセントでしょうか。単独でそのまま「トラ」と「トリ」というと同じようなアクセントになると思うんですけど、後ろに何か付けていると、「ト[ラがおる]」「トリ[がおる]」というふうになるんじゃないかなと思います。ちょっとアクセントが微妙に違うところがあったり。あとは標準語で言いますと、「日が出た」「火が出た」「屁が出た」、この3つを読んでみると、微妙に違うんじゃないかなと思うんですね。「ヒ[ガデタ]」「ヒ[ガ]デタ」「[へ]ガデタ」というふうに。「日が出た」「火が出た」「へが出た」。僕は最初のヒですね。お日様の「日」と燃える「火」のアクセントの違いを聞き取るのに最初すごい苦労した思い出があります。「全然違うんだよ」と調査をしているときには言われるんですけども、「え？」と言って、これが「出た」というところまで言ってもらうとはつきりするんですね。「日[が]出た」「火[が]出た」「[へ]が出た」という。

このように出雲は広島とか岡山、周りの方言とだいぶアクセントが違うんですね。それが違う理由は、またこれも我々にとっては今後の課題で、課題ばかりですけども、そういうことが出雲方言にはあるということです。アクセントを中心というのに、アクセントはこれだけしかありませんけれども。

次に、出雲方言の文法に関して、非常に標準語と同じと思われるところが多いかもしれませんが、実は微妙なところで違っているところがあるんじゃないかと思っています。僕が調べたところでの話で、皆さん自身の方言がどうなっているかというのは興味があるところなんですけど、例えば自分のことを「おら」とか、女性の方、男性も使うんですかね。「あだん」とかおっしやるかもしれないですけど、「これは私の手ぬぐいだよ」と言うときは、「これはおらの手ぬぐいだ」と言うんですけど、普通、標準語のところでは、「おらの」「自分の」というときには「の」を使いますが、出雲のあたりでは、「これはおらが手ぬぐいだ」というふうに「が」を使っても通じますよね。どうでしょう。

それで「お前」、相手に対して、「これはお前の手ぬぐいだ」と普通に「の」を使うこともある

し、「これはお前が手ぬぐいだ」というふうに「が」を使うところがあるのではないのでしょうか。けど同じ相手に向かって言う場合でも、ちょっと目上の方に言うときには、「これはお前さんの手ぬぐいだ」と「の」は入れても、たぶん「これはお前さんが手ぬぐいだ」というと、ちょっと違和感があるんじゃないかなと思います。僕の調査ではそう答えられた方がいました。

ほかに、「の」の前が生き物じゃなくて、「これは机のネジだ」とは言えるけど、「これは机がネジだ」とかは言えない。「の」と「が」の微妙な使い分けが出雲方言にはあるように感じています。詳しいところはこれから調査をしていかなければいけないなと思います。

「の」の話のついでで、標準語で「大きいのがいい」「小さいのと大きいものどっちがいいの」「大きいのがいいよ」というときの「の」ですね。その「の」を言わなくてもいいことが出雲方言にはあった。今、「の」を言わなくてもいい方が、もしおられたら、ぜひとも調査をしたいと思うんでうけれども。昔の出雲方言の会話を取った資料とかを眺めて見ると、例えば「がいながいい」という。「がいなのがいい」と言ってもいいんだけど、「がいながいい」と言って「の」なしで言うとか、「昨日、地震があったことを知っているか」という意味で、「きによ、地震があったを知っちゃーかね」というふうに、「の」とか「こと」とかを何も言わないで言えることがある。

おそらく、多くの方が標準語の「の」に当たるところに「やつ」とか、もしかしたら「ぶん」みたいなものを入れるのではないのでしょうか。「がいなやつがいい」「がいなぶんがいい」と。「これはおらがぶんだ」「これはおらのやつだ」と言うのも正しいですかね。「こと」に当たるところにも「やつ」を入れることがあるかもしれません。「昨日、地震があったやつ知っちゃーかね」とか、「昨日、地震があったこと知っちゃーかね」と言うこともあると思います。「やつ」とか「ぶん」というのは、「ぶん」は本当に、どこから来たんだと思うし、「やつ」も普通には人間とか物を指すんですけど、こういう「こと」を指すときも使えるというのは、出雲方言の大きな特徴ではないかと思います。

もう少し、今回の調査の中で出てきて面白いなと思ったのは、「孫は菓子が好きだ」というときに、「孫は菓子に好いちょーわ」と、ここに「に」が出てくるんですね。「私はお菓子が好きだよ」「菓子が好きだよ」とか、「菓子を好いているよ」と言うときに、標準語では「を」とか「が」というところに「に」が出てくるんですが、出雲では「孫は菓子に好いちょーわ」。何でこんなところに「に」が出てくるんだろうと非常に不思議に思います。

あと、最初、調査に来たときに聞いて、全然、分からなかったんですけど、「行かこい」とか「えかこい」と言いますよね。出雲方言の方は分かるかと思えますけれども、「さあ、行こう」という意味で「行かこい」と言います。これも「こい」って何なんだろうと思うんですね。あとは「行った」。普通、標準語では「海へ魚を捕りに行った」と言いますけれども、出雲では「海へ魚を捕りに行きた」という。「行きた」と言いますけれども、これも実は標準語の「行った」の方がちょっと変なんです。しかし、まあ、「行きた」というのは標準語とだいぶ違う形で、これも出雲の動詞の活用の1つの特徴になると思います。

最後に、相槌をするときとかに、「あげあげ」とか「そげそげ」と言いますよね。これは大社町でしたか、調査をしてお聞きしたものです。「誰々先生はおぞかったな」と、「おぞかった」というのはこっち側、出雲でも西側ですか、「誰々先生っておぞかったな」と言われて、「そげだ、そげだ、よく怒られたわ」「あげだ、あげだ」「あげあげ、よく怒られたわ」と言います。

「そげ」「あげ」は、おそらく標準語の「そう」とか「ああ」に対応するんですけど、標準語で、例えば「誰々先生は怖かったよね」と言ったときに、「そうそう、よく怒られたよね」とは言えると思うんですけど、「ああだ、ああだ」はちょっと使いにくいですよ。けど出雲では「あげだ、あげだ」「あげあげ」と普通に言えると思います。けど、じゃあ、「そげ」と「あげ」の使い分

げがないのかなと思うと、ちょっとまだはっきりとは分からないんですけど、例えばお友だち同士でしゃべっていて、「小学校のときに、あの木の下にタイムカプセルを埋めたな」と言って、「そげだったかいね」とは言うけど、「あげだったかいね」とは、ちょっと使いにくいという話を聞きました。これはまだはっきりしたことは言えませんが、「そげ」と「あげ」にはおそらく使い分けがちゃんとあって、標準語の「ああ」と「そう」にはないような使い分けがきっとあるんだろうなと思います。これも今後の課題の1つです。

最後にまとめです。皆さん、早足で言ってしまったので、十分に説明ができたかは分かりませんが、出雲方言、出雲弁には非常に言語学的、いろいろな方面から見て面白いところがたくさんあると思います。逆に、今、今後の課題です、今後の課題ですと何回も言ったように、分からないところもたくさんあるんですね。先ほど木部先生がおっしゃったように、このプロジェクトは今までずっと離島地域ですね、沖縄、奄美、八重山とか、八丈島という、本土の方言からちょっと遠いところをやってきましたけれども、本土の方言は全般的に大きく見ると、何となく標準語に近いから、まあ、標準語と一緒にだよと思われてきました。

今回の調査でも、「この単語は何て言いますか」とお聞きすると、「それはそのままだよ、一緒だよ」というお答えもありました。何となく標準語に近いと思いがちですけど、今見てきたようにいろいろなところで微妙な、本当にふっと、あ、そういえばこんなところは違うなというところが多くあります。逆にそういう微妙な違いだからこそ、消えていきやすいということがあるんだと思います。

ことばというのは、実際に生活の中で使っていけば、いろいろ便利な方に言葉は変わっていくものですから、なかなか今のまま、このまま変化するのはやめてください、消えないでくださいというのは難しく、皆さんが使っても、お子さん方、お孫さん方がこれを使うとは限らないし、言語を保存していく、維持していくというのは非常に難しいことなんですけれども、何とか生活に密着したところ、例えばさっきの「あげあげ」「そげそげ」なんていうものとか、「ばんじまして」というあいさつですね、そういうのを生活に密着した中で使っていって、ぜひとも出雲方言を残していただきたいと思います。僕は大社町で調査をしたときに、「ばんじまして」というあいさつですね、あれの使い方が、あれをいつ言っていいのか、僕は分からないんですけど、今、言ったらいいのかなとか思いながら、ドキドキしながら言うんですけど、ああいう単語とか、そういう言葉を生活の中で使っていっていただければと思います。

僕自身は出雲に2年前から来て、今後もいろいろなところへ調査に行きたいと思っています。もし、まちなかとか、そこら辺の道路で見掛けられましたら、「おい、平子、ちょっとおらに出雲弁をしゃべらせろ」と言っていただければ、いつでもレコーダーを持って伺いますのでおっしゃってください。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

3 出雲弁の息づかい

(司会) ありがとうございます。ではここからは講演に移ります。最初にご登壇いただくのは県立広島大学名誉教授の友定賢治先生です。先ほど友定先生にお伺いしましたら学生時代から出雲弁の調査に携わっていらっしゃるということで、出雲弁検定教科書をはじめ多くの方言に関する著書や論文を發表なさっています。今日は「出雲弁の息づかい」と題してご講演いただきます。では友定先生、よろしくお願いいたします。

(友定) 皆様こんばんは。友定と申します。よろしくお願いいたします。今の平子さんの話を聞いていて、彼がこれから先調査をして、挙げてくださったいくつもの課題についてその解答を1つずつ与えてくださると思います。そうすると出雲弁の研究はもう本当にずいぶん進むなど、今聴いていて本当にうれしくなりました。皆さんもたぶん同じ気持ちをお持ちだったと思います。最後に彼が言っていましたけど、ぜひ彼の名前を忘れないように。字で見るだけではなかなか覚えられませんので、皆様ちょっと声を出して、平子、平子、平子と3回言ってもらえませんか？ぜひよろしくお願いいたします。

私はご覧の通りの年寄りですので、彼のようなこれから先たくさん成果を上げてくれるだろうという期待は皆さんおそらく持っていらっしゃると思いますので、私は自由に真打ちの藤岡先生の前座を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

今日は40分ほど時間をいただいておりますが、最初に出雲弁の特徴として細やかさとか独自性と書いていますけど、特徴といえば独自性のことです。独自性では何の意味もないんですけど、独自性と書いています。

それから出雲弁ルネサンスと書いていますけれども、この危機言語のプロジェクトの1つの狙いは、若い世代、あるいは子供たちにその土地の方言を伝えていくということも狙いの中に入っていると思います。それをちょっとルネサンスという言葉で表してみました。

最初の出雲弁の特徴ということですが、これもここにある例の2つは、もう藤岡先生のものをそのままいただいたようなものです。2001年に『楽しい出雲弁だんだん考談』という本を小林忠夫さんと一緒にお書きですけれども、その中で3つ挙げてあります。ズーザー弁だということ。それから語彙が多くて古い言葉がたくさん生きているということ。具体的にどういう古い言葉が今生きているかというのは、この本以外でもたくさんの中です藤岡先生も挙げておられます。

もう1つ、優しい語り口だということ。この3つを、この本の中だけじゃなくいろいろな本の中でも書かれていたり、いろいろなところでの話の中でも藤岡先生はこれを強調されています。それをそのままいただいたようなものですね。

まず最初、優しい語り口といったあたりを少し私なりに資料のようなもので、こういうことかなというのを挙げてみます。これは「しょうゆを取ってくれ」という言い方のバリエーションです。上の方に行くほど丁寧な言い方だと。下の方に行くほどよりぞんざいというか、そういう言い方だというふうに聞いたものです。9つありますよね。

これでいいでしょうか。もう倍ぐらいあるとかならないでしょうかね。この中では一番、「取ってごいた」というのがぞんざいな言い方で、「ござっしょいませ」というのが一番丁寧だと聞いております。

私が生まれたのは岡山県の新見という山の中の町ですけど、こんなにたくさんはありません。3つか4つはあるかなと思いますが、これほどたくさんいろいろな待遇の度合いによって言い方

が分かれているというのは、本当に心優しい細やかな心遣いが感じられるものかと思います。

次は大変申し訳ない例ですけれども、こういうのがあります。出雲市と平田市が合併するとき、これも藤岡先生が中心となってお作りになった『出雲のことば』というものです。DVD と CD が入ってまして、いろいろなものが入っていますから、お聴きになった方がいらっしゃるかもしれませんが、ぜひこれは聴いてみてください。

その中に収録しているものの1つにこんなものがあります。すみません、変な話題を出してしまいました。ちょっと声を聴いてみてください。

<方言の音声再生> 「おどろきいりました。こちらの たいせつな おずいーさんわ おとりなしが できませんだったげでして いたわすいことで ござえました。おさみしゅー ございましょー。」。

(友定) 次は、亡くなった家の方の言い方です。

<方言の音声再生> 「ながらく かわえがって もらえますいたども なーなって しまえますいてねー。たえした いそがすいなかお くいて ごすいなはって。ほとけさんにわちよーだえもん いたすいまして。だんだん」。

(友定) いいですね(笑)。私も母が昨年亡くなりまして、こういったあいさつをしなきゃいけない場面があったんですけど、あ、どうも、どうも、と言うしか言いようがなくて何か恥ずかしかった記憶がありますけど、こういう、朗々とあいさつがなされるというのが本当にうらやましく思います。

同じ場面のものを、昭和41年にNHKが収録したもので、1884年とか1999年生まれの方が同じ場面のあいさつをしておられるんです。それをちょっとまた聴いてください。これは、場所は大原郡大東町でのものです。

<方言音声の再生>

(友定) すみません、ちょっと変な場面で。さっきのものより40年ぐらい前のもので、場所も違うんですけど、ほぼ同じようなあいさつがずっと伝えられてきているというのがよく分かりますね。場面に応じた、非常に心遣いの細やかな言い方がたくさん見られると思います。

さっきの『出雲のことば』の中におばあさんの会話というのがあるんですね。昭和52年に平田市、今は出雲市ですけど、平田市の有線放送で放送されたものだということです。これはもしできたら県の文化財ぐらいにしてほしいんですけど、本当に何か当時の雰囲気そのまま感じられるものです。時間で2~3分ですけど、ちょっとこれも聴いてみてください。

<方言音声の再生>

(友定) 続きは本当のDVDで(笑)。私の話なんかよりよっぽどこっちの方がいいと思うんですね。ずっと聴いていて、それで終わりにした方がいいかもしれません。

本当に私が学生のころにいろいろなところで聞いたおばあさんたちの会話がそのままの感じなんです。40年ぐらい前のですね。それが貴重な資料として保存されていたというのが大変うれしくて、さらにそれをこのDVDに入れてくださった藤岡先生にも感謝したいと思います。本当に

素晴らしい資料だと思います。出雲弁の本当に文化財的なものじゃないかと思っています。

今のおばあさんは最後に「まあ、かけなはんせ」、かけなさいと言っていました。座敷に上がったら今のことがもう1回繰り返されるわけですよ（笑）。あいさつで約30分はかかると思います。

次は少し古い言葉が残っているということですが、この言葉は皆さんご存じでしょうか。「ほぐし」、「ふくし」。土を掘る竹串がありますが、雑草なんかを抜くときに、雑草の横に串を刺して柔らかくして抜くという。それが「ほぐし」とか「ふくし」です。私も岡山県の新見でこの言葉は、まあ、私自身は使ったことはないと思いますが、使っていました。その道具もこういう形のものだというのがありました。

この「ほぐし」というのがいつごろ出てくる言葉かなと思っておりましたら、ここですね。『万葉集』の冒頭の歌です。天皇さんの歌です。「掘串（ふくし）もよみ掘串（ぶくし）持ち」という、ここに出ている言葉ですね。『万葉集』の最初に出てくるそういう言葉が、この出雲でも三刀屋とか、斐川とか平田に残っていると、広戸先生の『島根県方言辞典』の中に収録されています。『万葉集』の最初に出てくる言葉です。

それからこれは広島の方でも使いますけれども、「ワニ」ですよ。これも古い言葉です。ちなみに因幡の白兎のところに「海のワニを欺きて」という、ワニという言葉が出てきます。これが出雲では全部使うというふうに広戸先生の本にはございます。

今のは古事記のものでしたが、もっと古い言葉ではないかといわれているものの1つが、この「アユノカゼ」とか「アイノカゼ」といわれるものです。黒いマルを付けたところでこの言葉を使われているそうです。日本海側ですね。この言葉について室山敏昭という先生がこういうふうにかかれています。ちょっと最初の方は飛ばしまして、赤いところで、縄文語の貴重な遺存だと言われています。

この本はこういった、出雲が日本海側の中でどういう位置にあったか、あるいは出雲とか出雲弁がどういうふうにできたかということに関して非常に面白い論を展開されている本です。『アユノカゼの文化史』という本が地元のワン・ラインという出版社から出ています。ぜひこれでもご覧いただければと思います。

次に、これは皆さんお使いですか。「そうき」。この写真のようなものですが、それは『日本国語大辞典』という本を見ますと、方言としては、島根県、それから岡山、広島。私も使っていました。それが一気に沖縄とあるんですね。何で沖縄と出雲と中国地方だけにあるんだろうか。これも1つの謎というか、なぜだろうと思っていた言葉です。

こちらに来る直前でしたので、ちょっと申し訳ないんですけど、もとの本に当たることができなかったんですが、『日本の古代2』という本の中でこういうふうにかかれています。上山根茂先生の『出雲方言考』という本の中に書かれていました。

「そうき」の始原も縄文時代後晩期ごろではないかというふうなことが書かれているそうです。これは帰って確かめたいと思います。

今の「アイノカゼ」とか「アユノカゼ」とか「そうき」とか、縄文語という言葉が出雲に使われている言葉の中で出てきます。そのあたりも非常に古い言葉だということの1つの証拠かと感じます。

次は独自性ということに関してです。これも広戸先生の『中国地方五県言語地図』というのがあるんですけど、その中に、ここに「ハイゴンスル」という言葉ですよ。それがこの黒いマルのあたりです。ここで使われていると地図に書かれていますが、中国地方では出雲だけですよ。

390枚を超えた地図がこの本の中にあるんですけど、その中で出雲だけにある言葉が何枚ぐら

いあるかなというのを非常に大ざっぱに粗く考えて数えてみますと、70枚ぐらいのものに出雲弁独自の言葉があります。2割ぐらいですか。それが多いかどうかは判断が難しいかもしれませんが、出雲だけにという言葉がこの地図で70枚ぐらいは確認することができます。中国地方での独自性ということですね。

それからこれも変な例ですみません。「何々しさがる」というふうな言い方は皆さんあんまり使わないと思いますけど、『日本方言大辞典』を見ますと、この出雲と伯耆地方の雲伯地域だけとなっています。共通語では「しあがる」という、上がる方でしょうけど、出雲は「しさがる」になっています。非常に独特な言い方の1つですね。

次は、「アユノカゼ」、「アイノカゼ」ですが、この語については室山先生は出雲でできた言葉で、それが北陸の方にずっと伝わっていったんだろうと説明をされています。出雲などにあったものが北陸の方にずっと伝わっていくとなると、例えば有名なこれですよ。四隅突出型のこの墳丘墓。これも、この中国山地を含めてですけれども、出雲地方でのもの、それがこの地図にありますように、北陸、越前（こしのくに）の方にずっと広がっていく。

とすると、「アユノカゼ」、「アイノカゼ」というのは、この四隅突出型墳丘墓と価値としては同じような意味を持っている。同じような価値を持っているんですよ。墳丘墓の方はいろいろ宣伝とか大事にされているようですが、「アイノカゼ」も、これに劣らない価値を持っていますからね。出雲弁の「アイノカゼ」というものは非常に大事な歴史資料、歴史遺産です。

同じように日本海側にあるもので、フクロウの鳴き声を「ノリツケハウセイ」と聴く、というのがこの黒いマルです。これも日本海側にずっと黒いマルが付いています。これなんか、なぜ日本海側に「ノリツケハウセイ」というものがあるんだろうと。あるいはどこでできた言葉がどういうふうになんか伝わって日本海側にこんな具合になっているんだろうかということが、私は分かりませんが興味を引きます。もしかするとさっきの「アユノカゼ」なんかと同じようなものかもしれません。

さらに独自性ということでは、さっきも出ましたズーズー弁的なもの、それがこの東北のあたりにあるものが、出雲にあります。こういう東日本とか東北のものに多く特徴のあるものが出雲にぽつんとあるということですね。これはもういっぱい例があります。今の「い」と「え」の区別がなくなって、「え」になっているというふうなものですね。これも出雲にぽつんとあります。

東日本と九州と出雲が同じようであって、中四国と近畿に別な言葉があるというのは、考古学とか形態人類学の地図でこれに似たようなものがほかにもありますよね。頭の形が前後に長い横に広がっているかという地図もこれと近い形になっています。

無声化というのは例えばこんな発音です。「キク」、というのがありますね。〈テープ音声〉

「クサ」というのは。〈テープ音声〉

というふうな発音だと思ってください。すみません。こういった出雲に特徴的なものが東日本にずっと広がっているという。そういうものをいろいろ見つけることができます。お金を出して物を買ったというのを、西日本ではほぼ全域が「コウタ」と言いますから、この地域の「買った」というのは東日本と共通した独自性のある形ですよ。

さらに「おじ」とか「おば」という言葉。次男以下の男子をまとめて「おじ」と言うんだと。これは東北とか関西にはあるとされていますが、関西以西では島根県の隠岐と徳島というふうにご辞典にはあります。「おば」の方は次女以下の女子というのを、東北以外ではこの県だけ。島根県の隠岐とあります。

この、おじという言葉は、どうでしょう、このあたりでも使われますかね。次男、三男、四男、それらをまとめて、「おじ」と言うような。「おじさん」とか、「おじ」とか。それはないですか。

隠岐では確かに聞きました。じゃあ、ここでは使わないということですね。

今のような非常に細やかな心遣いのある、歴史のある独自性のある出雲弁。それを最初に木部さんが言っておられましたけれども、若い世代に伝えていくということを一層心掛けていきたいと考えています。

出雲弁を盛んにというのは、例えば、いろいろなことをやられているんですけど、今、出雲弁を話す人口がだいたいどれぐらいいるんだろうかと思って、これは大ざっぱな計算ですよ。確実な計算ではありません。島根県の人口は70万人を切ったというのが新聞のニュースにありましたが、現在69万7,000人ぐらいだそうです。

出雲弁の地域をその松江とか出雲とかに仮に限定した場合、その人口は47万4,000人ぐらいです。非常に乱暴に島根県の高齢化率を当てはめてみますと、30.9%。これは1年前、2013年ですけど、こういう高齢化率。65歳以上の人が出雲弁を話すかと仮に考えてみると、だいたい14万6,000人ぐらいとなっています。

この人数が、先ほど木部先生のもありましたけど、そんなに極端に少ないということではないと思いますけれども、現在出雲弁を話す人はこれぐらいの数があるのかなという概数ですね。やっぱり多いとは言いきれないと思いますから、出雲弁がこれから先なくなっていくのを防ぎ、若い世代に伝えていくということをいろいろな形で考えていっていただきたいということです。

もちろん今もたくさんの方がなされていて、藤岡先生の本とか、あるいは奥野さんにも非常に面白い本がありますよね。奥野さんのはCDも付いていますよね。あと、平田のお医者さんの牧野先生が作られた辞典もあります。

それから真ん中に丸が書いてありますけど、これも奥野さんが作っておられるもので、『出雲弁の泉』というのがあります。現在5,200語ぐらいここに集まっています。たくさんの方が集まっています。

それから方言保存会というのも斐川出雲弁保存会とか、あるいは隣町の宍道にも出雲弁保存会とか、保存会も2つありまして、これも非常に活発にさまざまな活動をなさっています。ですから、出雲弁を広めようというのは非常に盛んに行われてはいるというのはもう確実なところですよ。あと看板とか品物、商品に方言をいっぱい使っているいろいろなものが出てきているというのも各地で見ることができます。

【写真を見せる】

これは出雲市の駅にあるんですよ。

「だんだん」というのは、本当に出雲を代表する言葉としていろいろなところで見ることができます。これは大社の「だんだん薬局」。ここの方はいらっしゃるんじゃないでしょうか。どうでしょうか。それから「だんだん、ただいま営業中」。これは平田市で撮ったものです。「お食事処だんだん(暖々)」。字はこんな字を当てています。

それからだんだん道路というのもあるんですよ。それからこれは横田町にあった「だんだんスクエア」というところ。土産物にも「だんだん」はいっぱいありまして、こういった、「出雲弁クッキーだんだん」。「だんだんまんじゅう」。それから「だんだんペットボトル」。というふうにたくさんあります。

だんだんは今のようによく見ることができるんですけど、あるいは、これは昨日行った横田の「ツーズケーキ(チーズケーキ)」です(笑)。いいですよ。ツーズケーキです。これは、チーズがツーズに聞こえるということと、あと思いが通じるということもかけているんだと説明にはありましたが、チーズをツーズと。

それから「ほんそご」というまんじゅう。ちょっと商品の宣伝をさせていただきました。これは今でもあるんですかね。「ほんそご」というまんじゅう。ありますか。

(会場) はい。

(友定) ちょっと値段が高いですよ(笑)。それから「どげだや」。これは、ここに写っているのはずっと前の島根大学です。その前にこういった飲み屋さんがありました。自分で焼ける店、「よらいや」。これも松江市内で、ずいぶん前に撮ったものですね。それから、「ちょっこ一服せんかね」という、「ちょっこ」というのはおそらくチョコとかけているんでしょうね。

それからこれは松江市の情報誌だそうですけど、『だがあ』というのがあるそうです。こういうものがあって、さらにこれは先ほど平子さんのお話にもあった『砂の器』の舞台の地、亀嵩です。

今のようなもの以外に、ここに皆さん注目してください。この字。山陰の「陰」。この字はこの地方以外ではおそらく使わない字です。今、山陰中央新報は「陰」に変わっていると思うんですけどね。ここへ看板としてはまだ残っているものがありますよね。こういう文字にも地域性のあるものがあって、方言文字という言葉を使ったりしますが、この山陰の「イン(陰)」なんかもそうですよね。

あるいは「トウフテン」。共通語的に書くと、たぶん「腐る」という字を書くんでしょうけど、あの字。上にちょんがあるかどうかは分かれていますけど、こういう「豆富」という書き方。これも全国にあるわけではないです。このあたりが中心ですね。

さらにラフカディオ・ハーン。これはバス停だと思いますけど、「ヘルン」ですよ。「ハーン」のことを「ヘルン」という読み方をするのは、ほかのところではしないんじゃないですかね。「ヘルン、ヘルン」と言うのはこここの地方だけだと思います。これも方言と言ってもいいかもしれないです。

こういう山陰の「イン(陰)」とか、今の「豆富」とか「ヘルン」とか、さっきの平子さんの話もそうですけど、あんまり気付かないものとして、方言はこういった看板などで見ることもできます。

今のようにたくさん出雲弁の看板があったり、藤岡先生なんかのご努力があるんですけども、この7月に、授業を持っている57人の学生さんに出雲弁はどんなイメージがあるかと聞きました。広島県内の出身が約6割のようなクラスです。どういう答えが一番になると思います、皆さん。

先ほどの優しいとかそういうのが一番にどんと出てほしいんですけど、結果はこうです。「ない」が45人。出雲弁のイメージはと聞いたら、何も無いと言うんですよ。それが45名です。あとは出てほしいようなものが出てきます。

出雲弁というものが、我々は非常に大事な言葉だと思っていますけれども、県外の学生たち、広島は隣の県ですよ。その学生にもそれほどイメージとしてきちんとしたものは伝わっていないんだということを何か思い知らされた感じがしました。

「ゆっくりしゃべる」とか、「昔の人の言葉っぽい」とか、「巫女のイメージ」といったら何のことか知りませんが、こういうふうには書いているのも1人いました。やっぱり県外の人にとって、まだ出雲弁というのが具体的にこんな言葉でこういったイメージの言葉だと、あまり若い人には伝わっていないんだなと思います。

書いていたものを少し挙げてみると、そもそも出雲弁を知らないのでイメージできないというのが多かったんですけどね。同じことですけど、そういう方言があるのかと書いているのもいま

した。だんだんは出雲弁かとか、トビウオのことを「アゴ」と言っていたとか、こんなことを学生たちは書いています。どれほど真剣に書いたかは分かりませんが、県外の、隣の県の若い学生がイメージがないというのが圧倒的に多かったというのはちょっとショックでした。

ただ、これはたぶん若い女性だと思いますが、都会に出て暮らして、自分が出雲弁を使ったら周りの人がキュンとしたんだと。その1位がこれだ、2位がこれだというふうに、今は自分なりに順位をつけて5つ挙げています。「前から好きだったに」とか「シャイだがん」とか、「ごろごろしちょーよ」とか、「巨人が負けだがあ」、「待ちよるけん」とか、こういうのを使うと周りの人は何かいいなあと言ってくれたというわけですよ。

こういうふうに、若い人が出雲弁を使うと周りの人が、あ、この人の言い方はかわいいという評価をしてくれるものがあるということです。何かこの辺は少しヒントになりそうな気がしますね。

「今でしょ」と、誰か知りませんが何かこんなことを言う人がいますよね。島根県を訪れた観光客の数が平成25年は3,600万人。すごい数ですね。今、過去最高。地域別ではこの出雲地区が2,993万人。3,000万人近い人が1年間に来ているわけですよ。

これから先、結婚のことがあったりして出雲ブームはまだ続きますよね。今、その出雲弁を県外の人にアピールするもう絶好の機会、チャンスですよ。この時期を逃さずに藤岡先生にはますます頑張ってくださいと思っています。

最後にこういったことを提案。1つはあそこの歴史博物館に出雲弁の展示コーナーを作ってくださいということです。「アユノカゼ」、「アイノカゼ」というのは、あの墳丘墓と同じくらいの歴史的な価値があるんですよ。ぜひこういうことも考えていただきたいと。これが1つです。

2つ目は、出雲弁を話しますという方を募って、出雲弁で昔話を語ったり、あるいは観光客と茶飲み話をするような場所をどこかに設けて、例えば土曜日のこの時間からはおばあさんが出雲弁で昔話をするから観光客の人も子供たちも集まってきなさいということをする。それが子供たちに伝わる1つの方法かなと。あるいは観光客が、優しいとか温かい語り口を知ることができるものではないかなと。出雲弁のイメージがないという数を減らすことができるかもしれません。

もう1つ、ふざけてすみません。AKB48にならうような出雲弁のアイドルをつくりませんか。名前も考えてみました。だんだん48(笑)。どうですか。ちょっとあんまりこれはだめですかね。縁結び48。これもあんまりよくないですかね。アイノカゼ48。何かいいじゃないですか。縁結びの土地ですし、出会いの場、結婚もあるし。それでアイノカゼ48。この人たちが、「好きだに」とかいう言葉を使って人気になれば、出雲弁を伝える1つのことになっていくんじゃないか。各地で今、ご当地アイドルとかそういうのが盛んです。若い人に出雲弁を使ってもらう1つの手段かもしれません。

時間になりました。だんだん。あーがとござえました。(拍手)

4 出雲弁のある暮らし

(司会) どうもありがとうございました。続きまして藤岡大拙先生に、ご講演をいただきます。藤岡先生につきましては、あらためてご紹介するまでもございせんが、出雲地方の歴史、風土を多方面から分析、研究され、多くの著書をお書きになっていらっしゃるやうです。本日は地元研究者を代表いたしまして、また出雲弁保存会の会長として、「出雲弁がある暮らし」と題して出雲弁の魅力を語っていただきます。それでは藤岡先生、よろしく願いいたします。(拍手)

(藤岡) 先ほどは木部先生をはじめ、平子先生、友定先生など、この学界の若手からベテランの有名な先生方が、出雲弁はキチャナマシケン(きたならしいから)、やめてしまえとおっしゃるかと思いましたが、そうではなくて、年寄りには特にこれから伝えていってほしいと。特に友定先生はあらゆる角度からもっと出雲弁保存をやるべきだとの有り難いお言葉と申しますか、励ましをいただきまして、今まで保存活動をやってきた甲斐があったと、非常に嬉しく思っております。今日は、ダラジ(馬鹿)の一つ覚えで、どこでもしゃべっているのですが、出雲弁の三つの特徴をお話ししたいと思います。

特徴の一つ目は、語彙が豊富だということです。もう他では滅び去ったような言葉が、出雲ではエマネキ(今でも)使われているということ。あるいはまたそうじゃなくて、出雲地方だけの言葉を、エマネキ使っている場合もあります。それらの語彙がどのくらいあるか。もちろん正確なことは分かりません。でも、ここに加藤義成先生のお原稿がございせん。稿本です。『中央出雲方言語彙考』という稿本です。

これは、加藤先生が恐らく中央の誰かに頼んで、中央で刊行してゴシナハランカ(くださいませんか)といって、大学の先生か出版社の人に頼まれたようですが、なんと、けしからんことに、その原稿が古本屋さんのカタログに出ていたのです。それを地元の方が見つけて、さっそく購入して、島根県立図書館に寄贈されたのです。それを私はコピーさせてもらったんです。

この加藤先生の稿本を見ますと、だいたい出雲方言が二千五百語ぐらい載っています。だいたいこのぐらいかな、と思ったこともありました。しかしよく見ると、出雲だけではなくて、他国でもつかっているような言葉もはいつていますので、純粋な出雲弁はその半分の千二、三百語ぐらいかもしれせん。

今さっきスクリーンにも出ておりましたが、出雲市灘分町で開業しておられた、牧野医院の牧野辰雄先生が作られた『出雲のことば早わかり辞典』、今、これだけが手にはいる出雲弁辞典ですが、もっとも古本屋でしか手に入りませんが、貴重なものです。この辞典は、先生が長年患者とむきあって話をされた、そのときの会話のなかの出雲弁を記録したものです。「どげ、したかね(どうしました)」「はえ、背なんはが、ハシテ(ぴりぴり痛む)、エケマシエンガ(こまっています)」こういう会話のなかから、逐一拾い上げたもので、貴重なものです。全体で約七千五百語ぐらいありますが、よく見ると、発音がちょっとなまっているだけで、出雲方言語として収録されているものもあって、相当差し引かないといけません。

ここにもう一冊、岡義重先生の遺稿本『簸川地方式千語』があります。岡先生は斐川町富村(とびむら)の先生で、私が小学校で習った先生です。先生は民俗学の研究者で、柳田国男の指導のもとで、国立国語研究所の調査員になって、方言の探訪などやっておられました。この本は最近、NPO出雲学研究所が中心となって出版いたしました。

これを見ますと、私なんかでも分からんヤナモン(ようなもの)、知らん言葉がいっぱい出て来ます。でも、式千語というのはちょっと多いですね。やっぱり千二百語ぐらいが妥当な線だと思

います。でも、千二百語にしたってものすごく多いと思いますよ。皆さんも私も、共通語の上に千二百語ほど余計に知っているわけですから、われわれは、タエシタモン（すぐれた者）でございますねえ。

皆さんのお手元に、「平成版出雲弁見立番付」の一部をお配りしています。これは松江市が全戸配布しています『暮らしの便利帳』のなかに挿入されているものです。私と小林忠夫出雲弁保存会副会長とで作りました。これは売り物でございますが、掲載するのはエケン（いけない）と言いましたが、サッチ（是非是非）載せさせてゴセ（ください）と頼まれて、ほんなら、上半分だけ許可しましょうということで、話をつけました。この番付は初代出雲弁保存会長の木幡吹月さんが作られた見立番付を修正したものです。先ほど話にも出ました小学館の日本国語大事典を調べて、他国にない言葉だけを選んで作成しました。

「だんだん」は意外にも出雲弁ではありません。米子に行くと、バスのどてっ腹に「だんだん号」と書いてあります。以前、『坂の上の雲』をテレビでごらんになったら、伊予の松山のほうでも、「だんだん」と言っていましたね。だんだんは西日本一帯、九州の博多、大分、宮崎、鹿児島あたりでも、使われているそうです。ただ、島根県庁に松山から来た方がいまして、「あなたのところでは、今でもだんだんを使っていますか」と尋ねましたら、さっそく親御さんやおばさんに問い合わせをしてくれました。昔は使っていたが、今はまったく使わない、という回答をえました。だから、他国では急速に「だんだん」は使われなくなっているようですが、ひとり我が出雲では、いまだに「だんだん」を日常的に使っています。「だんだん」はいい言葉ですよ。有難うよりも、もっと心がこもっていますよ。それを出雲では、老若男女、老いも若きも使っているわけです。先ほどの友定先生の応援歌にもありましたが、我々はこれからもどんどん使っていきたいものです。

そこで、これです（資料「出雲弁見立番付」を示す）。アクセントも注意してくださいよ。まず一番の横綱、東の横綱は「はいごん」、つづいて「ぼいちゃげる」「がっしょ」「ひまぐらし」「せぎわい」「がしんけな」「えでほる」「なやみする」「お前さんとは、なやみしなはったげなね（家を造作されたそうですね）。結構さんでござえましたね」というふうに使います。西側だと、横綱は「こらまたなんだら」代表的な強い感嘆詞、感動詞です。つづいて「ばくらとする」「おえなおえな」「じじらに」「ぼやける」「つけごめ」「ししし」「ただくち」どうですか、分かりますか。もう一段下の前頭級を見ましょう。

「あおんだま」「きびし」「の一て」「くどまんど」「せつ」「けんげら」「ぞーれる」「はいざん」「ござなめ」「えきじ」「たける」「びがんな」「さい」「ふてぶる」「ちっと」。

西方へいきましょう。「へたくなる」「ほねががいい」「つぐなる」「みりんぼ」「てれぐれ」「むらさ」「もだえる」「どける」「したえきな」「しとな」「よじき」「おみける」「りんば」「かききり」「なえくる」。

皆さんのなかには、「りんば」なんかご存じない方が多いでしょうね。ルンバは知ってるけど。「りんば」というのは、羽釜の輪っかです。羽釜をくど（竈）にかけるとき、りんばでひっかけておくのです。「りんばは直（じか）につまんだなえじ、煤がつくけん」

もう一つ難しい言葉に「たける」があります。だいぶ死語になりつつありますが、酢酸のような強い刺激臭があって、つーんと鼻にくるようなとき、鼻にたけるといいます。あと、出雲弁の言葉の上の方に、小さい字で意味が書いてありますから、それを見て使ってください。出雲弁独特の言葉がたくさんあることがお分かりいただけましたか。

語彙の豊富さの次に、発音にも大きな特徴があります。ズウズウ弁というやつですね。東北地方がズウズウ弁だということは、広く知られていますが、東京から西、九州までの間で、唯一ズ

ウズウ弁がの遺っているのが出雲なんですよ。さらに出雲弁には、かなりきつい訛があります。そこで資料の裏のほうを見てください。岡義重先生の書かれた『郷土斐川物語』のなかに出雲弁が載っております。それをちょっと拝借してきました。最初のところを少し読んでみましょう。へたくそですが。

「今度はおばあさんに聞いた昔の女の子の遊びをお話しましょう」ここまでは共通語ですよ。これからです。「あのな、おらんちが、ほせ時ねわな、よう手毬ちきをして遊んだもんだわ。グンマリだなての、綿を芯ねして、木綿のふきえとをあちに巻えて、丸ねしての、そーを五色の糸で、かがったもんだ。白玉の上へ赤や青の糸で、麻の葉ちなぎや松かがりやなんかや、美事ね、縫いちけることを、手毬をかがるてて言ってな、そのかがることが、おれしかったもんだ。その美事な手毬を、縁側や板の間でちくと、ようちけての、歌おたえながら、両手でトントンちえたわな。近えころのグンマリみたえね、足あげたり、尻からげしたりしたもんだなて、縁側ね坐って、歌ね合わせて、ちきやこしたものよ。おたって聞かしょか、手毬ちき歌を。忘れてしまったかも知れんがの。」

こういうのです。これは縁側でおばあちゃんが、孫娘に話している情景です。資料の次へいきましよう。これは『里坊郷土誌』です。里坊は雲南市三刀屋町の山の中です。稗原からも行けますよ。此処の郷土誌には囲み記事がたくさん載っていますが、その一つがこの資料です。出雲弁の用例としていいじゃないかと思います。第一行目は出雲弁。第二行目はその翻訳文。第三行目は出雲弁、というぐあいになっています。ですから、皆さんは出雲弁を先刻ご承知ですから、奇数行だけ読むことにしますよ。その前に、ちょっと申しておきたいのですが、里坊は山に囲まれた所ですが、その山はほとんど田部家の持ち山だったそうです。

「尼子さんの時代から オランチの山だとおもっちゃったけん
 オチのもんだけん デヒャーシーだないてて
 田部のダンサン エワッシャーげな
 オツァン ドゲ 思わっしやーかね
 オラ ヨークソ シゴシーてて ホドがあーわ と思うじね
 ジゲジの山を ゼニで買えだことなてて ワジラーヤナワー
 オチャ エンバト オババが センド ワジラッタシ
 オジジの 法事もあたっちょーし エゴハゴすーなかえね
 カカが メヤシンナーだけん エーモンバッカーで クターベタワ
 フダリテ アエマチ シーだけん ドコゾ ゴモシンでも
 エワニャー クウハテがねとまっしやい
 ドッコネモ カエサメしたてて ゼニケなもんは
 アーシマセンワ オザワキが エチバン クターベましたわ
 ソーネシテも 松四郎さんは キーなことで
 エラシジことでしたわ アラ シンカタが オカシじね
 子供シが エトシナゲで ならんがのー」

この次は、恐らく悔やみの文言が続くでしょう。

「なーんと、驚きいりました。とうとう、松四郎おじいさんのオトリナオシ（回復）が、ござえませだったゲデ（そうで）、エタワシ（労しい）こととござえましたねー」という文言から、ながながとお悔やみの口上がはじまります。先ほどの友定先生の話とつながっていくわけです。出雲の挨拶は、慶弔、日常にかかわらず、長くて丁寧です。ちょっとした挨拶でも、五、六ぺんは頭をさげなければなりません。もちろん、その間に、しっかり口上もしゃべります。今の若いもん

は、いったいなんですか。「オッス」とか「やあ、どうも」これだけで終わりじゃないですか。都会の方はだいたいこんなぐあいでしょう。出雲人は最敬礼に近い挨拶をしています。出雲はいいところですよ。

そこで、次にそのいいところをやらないといけませんね。第三番目の特徴です。それは穏やかで、柔らかい語り口です。相手に不快感や負担感をあたえないためです。それだけに、内容は曖昧で分かりにくくなりますが、出雲人はそれでもいいと思っています。そこで、曖昧な語り口についてお話ししてみましょう。

大津か今市の、或る家としましょう。親類が奥の方（山間部）にあった。何処でもいいですが、例えば今日先生たちが調査に行かれた日登（雲南市木次町）としましょうか。日登の親類のおつつあんが、今市の家へやってきた。

「今日（こんにち）は、今日は、誰かおられ一かね」

「はい、おえでましたね」と言って出て来たのは、おばさんでした。

「コラマタナダラ（まあ、これはこれは）、奥のおつつあん、今日はドゲしたことでしかね」

「エンヤ、エマエチ（今市）ヘデー（出る）用があつたついでに、門（かど）とおつたけん、チョッコ（ちょっと）、のぞえてみたがね」

「マージ（まあまあ）、フサシブー（久しぶり）でしたね、さ、上がってごしなはえ」

「エンヤ（いやいや）、今日はソゲナシコ（そんなわけ）で、チョッコ、顔見ねのぞえたばっかだけん、上がらんじね」

それから、しばらくオエタリフツパツタリ（押したり引いたり押し問答）して、

「そげかね、そんなら、カケゴシ（縁側に腰掛ける）も、ナンダラケン（よくないだろうから）、チョッコシ、あがらせてモラワカノ（もらいましょうか）」

上がりますと、畳の上で正式な挨拶がはじまります。例の五、六ぺん頭さげるやつ。

「えらえ、ノク（暑い）ことでござえますがねえ」「そげそげ、ねえ。毎日、ノクタラシテ（暑くて）アバキマセン（やりきれません）がねえ。」「お前さんトカ（ところは）、ゴット（みんな）まめなかね」「だんだん、だんだん、お蔭三さんで、ゴット、シナーグナー（どうやらこうやら）やっちゃますがね。ソーヨモ（それよりも）お前さんとはね」というように続きます。

そのうちに、奥のおつつあんは亭主のおやじの姿が見えないのに気がつきます。

「おばさん、今日は此処のおつつあんの姿が見えんが、何処へえきちやったかね。畑かね」

「えんや、チョッコシ」

「チョッコシでは分からんがね。散髪屋かね。スーパーかね」

「えんや」「按摩かね」「えんや」「アーエケ、えんや、えんや、では分からんがね。エシヤハン（医者はん）かね」「は一、エシヤハンへ、チョッコシ」

「なにね？ どころがエタシ（病気）かね」「えーんや、自転車でちょっこしマクレテ（転んで）……」「そーで、どげなアイマチ（怪我）だった？ たいしたこたなかつたかね」

「はあ、マクレタとこへダンプがやってきて」

「ナニヤ（なにになに）、そら一、おおアイマチだがね。そーで、何処へ入院しちよってだ」

「中央病院ですが」「そーで、ナンボ（どれくらい）入院しちよってかね」

「ホホロ（おおよそ）一ヶ月くらいですかねえ」

「うわー、そらたいへんだ、知らんとはいえ、見舞いだえセスコネ（せずにいて）、失礼しとったのー」

おばさんは、なんでそんなに逃げまわるのでしょうか。はじめから、はっきり実情を言えばいいのに、と思うでしょう。出雲人はそこのところにもものすごくこだわる。亭主が大怪我をしてい

ることが分かったと、見舞いだのなんだのと、相手に迷惑をかけることになる。だから、もう、言わんように、言わんように、内緒にして、内緒にしておこうとするのです。

奥から来たおっつあんも出雲人ですから、そこは追求の手をゆるめない。ぴったりくっついてネネシク（しつこく）聞きますだけん、とうとう言わざるを得ないようになります。おじさんは、「コラマタナンダラ、失礼しとったねえ、」というようなことで、後日、羊羹箱でも持って、中央病院へ見舞いにいくということになります。

こういうふうには、万事についてあまりモノを言わない。言ったら相手を不愉快にさせる、負担感を抱かせることがありますから、穏やかに、曖昧に、どっちかという、よく分からないようなふうな言い方を出雲人はするのです。顔の表情も豊かではありません。能面のような、というのは言い過ぎですが、大げさな表情はいたしません。すべてセーブした表現です。

そのため、相手の顔色、相手の表情を読み取る感覚は、ものすごく鋭いものがあります。微かな表情のくもり、口元や目尻の微かな動き、そういったものに敏感に反応するのです。象徴的な芸術である能や狂言を、出雲人は地（じ）で行っている。言葉よりも表情を読み取る感性がつよいのです。ですから、現代の風潮には合いませんわ。若い人には住みにくいかもかもしれませんね。出雲やなんかはやーめただ、と思っている人も多いでしょう。ところが、慣れてくると、これくらい住みやすい人間社会はないんです。

私なんか出雲が好きで好きでコタエン（たまらない）です。もう間もなく、お迎いの駕籠が来る年齢ですが、「チョコシ、待ってゴシナハイ。モチト（もうちょっと）、エンジョイしてから逝きたいですケン」と言いたいですね。出雲は豊富な語彙、ズウズウ弁、そして非常にデリケートな言葉遣いがある、ということをお願いして、私のつたない漫談を終わりにします。せっかとお二人の先生がアカデミックなお話をなさった後で、なんだか、マゼクラカス（だいなしにする）ヤナ（ような）お話をしておし訳ありませんでした。ご静聴を有難うございました。

出雲方言公開講座 / 国立国語研究所セミナー

出雲方言のつどいー

出雲ことば再発見ー

参加費 無料

日時 8月20日(水) 19時-21時

場所 出雲市役所 1F「くびき大ホール」
定員 200名

-主催-
国立国語研究所「先進方言プロジェクト」、
高級漢学研究会、出雲市

-応募方法-
電話・FAX・E-Mailにて
◆事前申し込み◆
◆定員になり次第締め切り◆
申し込み期限：8月8日(金)
-問い合わせ・申し込み先-

出雲市文化財課
電話：0853-21-6993
FAX：0853-21-6937
E-Mail：bunkazai@city.jzume.shimane.jp

国立国語研究所が行う出雲方言の現地調査に合わせて、公開講座を行います。

-- 講座プログラム --

 「出雲方言の輪廓」 平子達也 「アキモリを中心とした方言の特色」 国立国語研究所 国語学研究室 准教授	 「出雲弁の奥づかい」 友定真樹 「出雲方言の歴史」 国立国語研究所 国語学研究室 准教授	 「出雲方言の輪廓」 平子達也 「アキモリを中心とした方言の特色」 国立国語研究所 国語学研究室 准教授
--	---	--